

## 「スーホの白い馬」の教材論的考察

呉羽 長

(一九九〇年三月十九日受理)

### A Consideration of "Sūho no Shiroi-Uma" as a Teaching Material for Elementary School Students.

Susumu KUREHA

#### 一 はじめに

「スーホの白い馬」(『しょうがくしんこく』二年下、昭六〇・三 文部省検定済、昭六三・三改訂検定済、光村図書出版)は、昭和三十六年十月『月刊絵本こどものとも』に、「大塚勇三やく 赤羽末吉え」として発表された『スーホのしろいうま』を初出とする。この再話には加筆され、昭和四十二年福音館書店より『スーホの白い馬』として発行(大塚勇三再話 赤羽末吉画)、更に修正を加えられて小学校国語教材として右教科書に収められることになった。その教材化には大塚勇三自身の全文にわたる検討がなされている。<sup>1)</sup>

この作品の原話については、『スーホのしろいうま』(『月刊絵本こどものとも』昭三六・一〇)跋文に、

この物語は、モンゴルの民話「馬頭琴」を翻訳し、幼年向きに再話したものです。(中略)原話は馬頭琴(馬頭のかざりのある胡弓のような楽器)の由来話になっていますが、読者対象を考えて、その部分をはぶ

きました。

とあることから、この月刊絵本の発行以前に採取されていた「馬頭琴」というモンゴル民話の存在が考えられるが、それには、一九五八年(西暦、昭和三十三年)六月、中国社会科学院文学研究所中国民間文学研究会主編の『中国民間故事選第一集』(人民文学出版社)所収「馬頭琴」(塞野記)が該当するものと思われる。この、馬頭琴の由来話の形式をもつ採取話は「スーホのしろいうま」(『月刊絵本こどものとも』)や「スーホの白い馬」(福音館)と筋書がほぼ一致し、表現の重なる箇所が多くみられる。その点から大塚勇三はこの採取話を再話したものと認めることができる。

ただし「スーホのしろいうま」(『月刊絵本こどものとも』)の再話は、大塚勇三が右のモンゴル採取話(原話)を大幅に改変したものであり、更に彼は「スーホの白い馬」(福音館)、「スーホの白い馬」(『しょうがくしんこく』二年下)において改稿を重ねている。それは原話のもつモチーフを膨らまして固有の作品世界を形成する営為であるといえる。

大塚勇三は原話をどのようにうけとめ、それをあらたな絵本の世界として

作りあげているか。更に小学校国語教材として改稿がなされる際どのような配慮がなされているか。各々の再話の段階を比較しながら、絵本の最終段階としての『スーホの白い馬』（福音館）の作品世界の特質と意義を明らかにし、それが「スーホの白い馬」（『しょうがくしんこく二十年下』）に導かれるありようを考察していきたい。こうした成果の上で、教材としての『スーホの白い馬』の指導上の留意点等を明らかにしていくことにする。

なお、論述の都合上、以下、『スーホのしろいうま』（月刊絵本こどものとも）を『こどものとも版再話』、絵本『スーホの白い馬』（福音館）を『福音館絵本』、『スーホの白い馬』（『しょうがくしんこく二十年下』）を『光村版教材』と略称して考察を進めていく。

## 二 『こどものとも版再話』

原話「馬頭琴」<sup>②</sup>（『中国民間故事選第一集』所収）は、村松一弥氏編『中国の民話上』（昭四七・一一、毎日新聞社）に、同じ題名で宮治利子氏により逐語訳が施されている。原話の中国語に右の訳文を併せ掲げながら、このモンゴル民話が『こどものとも版再話』においてどのように改変されているか、考えてみたい。

まず、この再話は、『月刊絵本こどものとも』が対象とする就学前の児童向けに描かれているという事情を押さえておく必要がある。原話ではスーホ（蘇和、宮治氏の訳ではスフ）が十七歳であったものが、『こどものとも版再話』では十代前半程度の子どもの印象をもって対象読者に近づけて描かれているわけである。また、十三場面に分けて描かれた絵（赤羽末吉）も対象読者に応じて、強い意志を感じさせる少年スーホの素朴な愛らしい表情を描き出している。

そうした配慮の一環として、原話の内容を簡略化して理解しやすくしていることも見逃せない。例えば、原話には

据说、馬頭琴最早是由察哈尔草原上的小牧童——蘇和做成的。（馬頭琴は、そのはじめ、チャハル草原のヒツジ飼い、スフが作りだしたものである。）

という前書きがあるが、それを省略して原話のような馬頭琴の由来を語るという形式をとらず、直接にスーホの説明に入って、複雑な話という印象を脱して筋が容易にのみこめる操作をおこなっている。この点①①をはじめとして、同様の事情による改変の例は、

②冒頭部スーホが歌のうまい若者であるという記述（これが馬頭琴の製作の布石となる）の省略。

③オオカミを防いだ際の白馬の汗にまみれた様子（長い時間そのオオカミと戦っていたことを示す）の省略。

④とのさまの家に殴られ蹴られて気を失ったスーホが仲間にあたすけられて家に戻る記述、及びけがをした彼がおかあさんの看病でだんだん元気になる記述の省略。これらの省略によってスーホのところへ白馬が帰ってくるのはその競馬の日の夜ということになっている。

⑤とのさまから逃げようとして走り去る白馬に家来たちの矢が一本一本あたっていく様子の省筆。

⑥話の末尾、モンゴルじゅうに広まった馬頭琴の音色に聞き入って一日の仕事の疲れを忘れる草原の人々について「久久不願離去。（そしていつまでもいつまでも、そこから離れようとしなかったのであった。）」とある記述の省略。

などがあげられる。④は、スーホの一人で帰れないほどの傷ついた姿を就学前の子どもに想像させるのを控えさせようとしたからか。⑤も同様に残酷な場面の想像を避けさせようとする配慮によるものか。⑥については、この句が余韻を湛えているものの、この種の記述は必要以上に馬頭琴の音色への執着の感触を与え、話の末尾に置くにはふさわしくないと判断されたからであ

ろう。

また、対象読者の理解を助けるために加えられた記述として、原話で蘇和每天出去放羊、早晚幫助奶奶做飯。(スフは、毎日ヒツジの番をしたり、朝と晩には飯たきをてつだったりした。)

とあるところを再話では

スーホは、まいあさ はやく おきると、おかあさんを たすけて、ごはんの したくをします。それから、ひつじを おつて、ひろい ひろい くさはらに でていくのでした

となっている。モンゴルの広大な草原をイメージさせる意図をもった挿入と思われる。

このように、各所に対象読者の実情を考慮した上で原話の描写をやさしくしたり理解を助ける語を入れてその世界に入りやすくしているところが認められるが、そうした基本的な操作の上で内容に関する改変がおこなわれているわけである。

まず競馬の描写として原話では、

賽馬開始了、好多身強力壮的小夥子、都揚起了皮鞭、縱馬狂奔………到終点的時候、還是蘇和的白馬跑在最前進。(競馬がはじまった。たくましいわかもんたちは、むちをふりあげ、先を争って、ウマをとばした。………ゴールまでずっとスフのシロは先頭を走った。)

とあるところ、

けいばが はじまりました。くにじゅうから あつまった、たくましいわかもんたちは、いっせいに、かわの むちを ふりました。うまはとぶように かけます。でも、みんなのせんとうきつて はしるのは—しろい うまです! スーホの のった しろうまです!

と描かれていることが注目されよう。ひきしまった躍動感あふれる筆致で、ひきこまれるような臨場感を湛えているが、こうした読者をひきつける表現

は、夢の中に現れた白馬に教えられて馬頭琴を作るスーホの姿として「スーホは、めがきめると すぐ、ことをつくりにかかりました。ゆめで しろうまが おしえてくれたとおり、ほねや、かわや、けを、むちゅうで くみたてていきました。」とあるところなどいくつかの箇所に見られる。

更に、右のような表現上の操作に加えて、原話の構成・表現等を変えて、大塚勇三の独自の意図に沿って話の主題を強調しているところがみられる。以下、そうした点をあげてみたい。

まず、オオカミを退けたあとの記述として、原話に、

從此、蘇和和小白馬真象一対好朋友一樣、一時一刻也分開了。(それからというもの、スフとシロは、まるで親友のように、かたときも離れなかつた。)

とあるのが、

「ぼくの かわいい しろうま。ほんとうに ありがとう。これからさき、どんなときでも、ぼくは、いつも おまえと いっしょだよ」

とスーホのことばに代わっているところに着目したい。スーホの意志として彼と白馬がこれから離れることはないということの表明になって、白馬との心の繋がりの強調に大きく与るものとなっている。つまり、このスーホの意志を表すことばが物語を一貫して、スーホと白馬の「どんなときでも、いっしょ」という関係を作りあげるのである。ちなみに白馬の死後、馬頭琴を作りあげた折のスーホの描写として、原話にはない「ようやく、ことはできあがりました。スーホは、どこへいくにも そのことをもっていきました。」という記事を書き入れている。

こうした表現上の操作は、同様に「どんなときでも、いっしょ」というモチーフを強調するための独自の構成の変更と呼応して、効果的に感動を盛り上げ、主題的凝縮性を高めることになる。つまり、白馬がとのさまのところから逃げ出す叙述の位置が原話のそれを変更していることである。原話で

は、とのさまの前で痛めつけられたスーホが家に帰り傷を癒していると背に矢の刺さった白馬が戻って来て スーホの前で息をひきとると一連の叙述が先行し、遡って白馬の負傷した経緯が物語られるという筋だてになっているが、《このものとも版再話》では、家に帰り着いたスーホが傷を癒しながら悶々としている時間と並行する形で白馬のとのさまから逃げ出し負傷した経緯が語られ、各々が相手を求めつついる気持ち、白馬の帰り着きによって一気に盛り上がるという効果を作り出している。

その、白馬がスーホのもとに帰ってきてスーホと再会する場面の盛り上がりは、原話では、

真的、是小白馬回来了。馬身上中了七八支利箭、汗水直從身上流下來。（ほんとうに、シロが戻ってきたのだ。身体には七、八本の矢がつきささり、汗を滝のように流して。）

とあるところ、

ほんとうに、しろうまは かえってきました。でも、からだには、やが なんぼんもつきささっています。こんなに きずをうけながら、しろうまは やつとのおもいで、だいききな スーホの ところへ かえってきたのです。

と書き加えられていることも与っている。前の構成の組み替えに即応したものであり、両者の呼応によってここに感動を集約させることになるのである。

ひきつづきスーホのもとに帰った白馬が力尽き死んでいく描写について、原話は、

蘇和咬牙、忍住内心的痛楚、拔掉了馬身上的箭。血水馬上便從傷口流出來了。馬因傷勢過重、第二天便死去了。（スフはくやしさに歯をくいしばり、胸のいたみをこらえながら、矢を一本一本抜きとってやった。が、抜きとった傷口から、血はどんどんふき出す。あまりにも傷は深

く、シロはあくる日死んでしまった。）

とリアルにその死を追うが、《このものとも版再話》では読者である幼い子どもたちへの影響も考慮してか、そのむごさ、痛ましさを感ぜさせる表現をやめ、

でも、しろうまは よわりはていました。いきは だんだん ほんくなり、めの ひかりも きえました。

と美しく死を描き、厳肅・莊重で印象深い場面を作っている。

このようにみると、スーホと白馬の結び付きを感動をこめて表現する形で一連の改変がおこなわれているものと捉えることができるが、そのことと関連して、作り上げた馬頭琴をひくスーホの描写として、原話では

每当他拉起琴来、他就会想到王爺的仇恨、回憶起他乘馬急馳的興奮心情、這時琴声也就更加美妙了。（スフは胡弓をひくたびに、とのさまへのにくしみをあらたにし、またシロに乗ってかけまわった時の楽しかったことを思い出すのだった。）

と、とのさまへの憎しみが白馬と一緒に楽しい時間と並行して記されるところが、《このものとも版再話》になると

それを ひくと、しろうまを ころされた くやしさを、しろうまにのって くさはらを かけた たのしさを、おもいだします。

と描かれている。とのさまへの憎しみが白馬と楽しく過ごした時間の回想によって浄化され、更に

そして、スーホは、すぐ そばに、しろうまが いるようにおもった。

という、原話にはない書き添えによって澄みきった馬頭琴の音色の中に、スーホと白馬の悲しみを充填するしみじみとした慰めを感じることができ、そんなとき、こののねは、ますます うつくしく ひびき、きくひとの ところを ゆりうごかすのでした。

を導くのである。

以上、この《こどものとも版再話》は、叙述を就学前の幼児向けにわかりやすくして、その上で緊密な構成を維持しつつスーホと白馬の結び付きを強調する形で意図的に改変がなされていることが確認された。ただし、こうした形での改稿は、原話が本来内包するものを削りとることにもなっている。その削られた内容が、対象読者をひきあげて更に改稿された《福音館絵本》によって復活する。そして、《こどものとも版再話》の段階の内容に加えて新たな意義を抱懷する作品に膨らむことになるのである。

### 三 《福音館絵本》

ここで改稿された再話は、本文二十三場面四十六ページよりなる。赤羽末吉により、横広の絵本の形を生かして書きあらためられた絵は、広々としたモンゴル草原の地平線を背景に凛々しいスーホの姿を描き出す。絵本の対象読者を就学期の子どもにひき上げていることによって、可憐さの残る《こどものとも版再話》のスーホの姿を、そうした性格の若者にしたのである。<sup>(4)</sup>

対象読者のひき上げに伴い、前述の、大幅に叙述を削除して理解しやすい性格のものになっていた《こどものとも版再話》に対して、原話に比較的忠実に改稿をおこなっていることも注目に値することである。それは、前節で指摘した《こどものとも版再話》におけるおもな削除の箇所①⑥のすべてが復活して原話の記述が生かされていることで首肯できよう。たとえば①では、前述のように馬頭琴の由来を語る形をもっていた原話に対し、《こどものとも版再話》では前書きを省略して直接スーホの説明から白馬との出会いを語り起しているが、この《福音館絵本》では、

中国の北のほう、モンゴルには、ひろい草原がひろがり、そこに住む人たちは、むかしから、ひつじや、牛や、馬などをかっていた。

このモンゴルに、馬頭琴という、がっきがあります。がっきのいちばん上が、馬の頭の形をしているので、ばとうきんというのです。けれど、どうしてこういう、がっきができたのでしょうか？

それには、こんな話があるのです。

と原話にそって、馬頭琴の由来話として語りおこされている。それは、死んで夢の中に現れた白馬の教えによりスーホが馬頭琴を作り上げた折の、がっきは、できあがりました。これが、ばとうきんです。ということばと照応し、話の構成を確かなものになっている。

同様に、物語の構成を確かにする効果をもった原話の記述の再活用ということでは、前節④にあたる白馬をとられ傷ついて家に帰ったスーホの様子としての、

スーホのからだは、きずや、あざだらけでした。おばあさんが、つきつきりであてをしてくれました。おかげで、なん日かたつと、きずもやっとなおってきました。それでも、白馬をとられたかなしみは、どうしても、きえませんでした。白馬はどうしているだろうと、スーホはそればかりを考えていました。白馬はどうなったのでしょうか。

と書かれるところも注目される。これは原話の「在老奶奶殷切地照護下、休養了几天、身体漸漸地復起来。（おばあさんの手あつい看病で、休んでいるうち、だんだんと元気になった）」とあったものが、《こどものとも版再話》に描かれず、この《福音館絵本》になって生かされたもので、前節で指摘したような、離れ離れになったスーホと白馬の互いに求めあう時間の併行という構成を意識した上で、更に内容を膨らましたものと考えられる。

このほか、《こどものとも版再話》で省略されていた記述でこの《福音館絵本》になって原話に近く描き加えられている箇所について考えると、前節②の項目、冒頭部に引き続いたスーホが歌のうまい若者であるという説明は、《福音館絵本》になって、

スーホは、とても歌がうまく、ほかのひつじかいたちにたのまれて、よく、歌をうたいました。スーホのうつくしいうた声は、草原をこえ、遠くまでひびいていくのでした。

と描かれている。原話では「他更有着非凡的歌唱天才、領近的牧民都很願意听他唱歌。(スフは歌もとびきりじょうずで、近所の衆は、みなスフの歌を聞きたがった。)」とあり、それを生かしたものである。これが末尾の馬頭琴の製作の布石になっている。更に右の引用の後半部、「スーホのうつくしいうた声は、」以下のことが加えられているが、これは広々とした草原をイメージさせるにも効果的な表現であろう。「草原」ということばは《こどものとも版再話》の「くさはら」に対応し、それに比べて広大な自然を感じさせるものといえるが、ちなみにそうした広大なモンゴルをイメージさせる意図的な記述としては、ほかに仲間達に競馬に出ることを勧められたスーホについて「そこでスーホは、大すきな白馬にまたがり、ひろびろとした草原をこえて、けいばのひらかれている町へと、むかいました。」とあることにも留意したい。この中の「ひろびろとした草原をこえて」ということばは、「大すきな白馬にまたがり」の中の「大すきな」とともに、原話にも《こどものとも版再話》にもないものである。

また、成長した白馬について《こどものとも版再話》では、「からだはゆきのように しろく、そのうえ、とてもたくましくて、だれもが みとれるのでした。」とあるところ、《福音館絵本》ではほぼ同内容の記述のあと、

スーホは、この馬が、かわいくてたまりませんでした。

とあり、原話に「蘇和更是愛得不得了。(が、それ以上にスフのかわいかりようは大変なものだった。)」とある記述に従っていることがわかる。<sup>5)</sup>

一方で、オオカミを防ぎきった白馬にスーホが語りかけることばとして、前述のように《こどものとも版再話》には「ぼくの かわいい しろうま。ほんとうに ありがとう。これからさき、どんなときでも、ぼくは、いつも

おまえと いっしょだよ」とあったものを、この《福音館絵本》では、

「よくやってくれたね、白馬。ほんとうにありがとう。」

とだけなっていて、後半のことばを除かれ、原話(「小白馬呀!多虧了你了。……」(「しろや!ありがとうよ」)に近い形になっている。この削除はスーホと白馬の繋がりというモチーフの押し進めには抵触するものであるが、原話に忠実であることをまず優先させたものと考えることができる。

競馬に優勝してとのさまの前に導かれたスーホが銀貨三枚とひきかえに白馬を置いて行けといわれた際の記述に、《こどものとも版再話》では、「スーホは びつくりして、いいました。」とあったが、《福音館絵本》で

スーホは、かっとなつて、むちゅうでいいかえました。

となつていることも注目に値する。原話で「蘇和一听王爺的話、使他頓時氣惱起来、(とのさまの言葉をきくと、スフはカッとなった。」「我能出壳小白馬嗎?」這樣想着、他毫不思索地回答着。<sup>6)</sup>(スフははつきりとこたえた。)」とあるのに近い記述になっているのである。《こどものとも版再話》では領主との対立による憤懣の心を見せず、単なる驚きとして描くが、この《福音館絵本》になってそれが憤りとして再び描き直され、スーホの正義感を実立させることになっている。

このスーホの怒りと関連することとして、人々の前で白馬に乗ってみせようとして振り落とされたとのさまについて、《こどものとも版再話》で、「おうさまは、どなりました。」とあるところが、

とのさまは、起きあがろうとまがきながら、大声でどなりちらしました。(《福音館絵本》)

と変えられている。原話では「王爺爬起来大喊大叫(とのさまは、起きあがると、大声で叫んだ。)」とあり、こども原話に近づけて訳したことが窺えるが、原話に加えて「まがきながら」「どなりちらし」ということばを入れ横柄などのさまの不様な姿を、際立てているといえる。なお、このようなとの

さまの造型の姿勢は、白馬をスーホから奪い取り家来たちをひきつれて帰る形容として、『こどものとも版再話』になかった「おおいばり」ということばが使われているところにも現れている。この箇所、原話には「威風凜凜地（意気揚々として）」とあり、この記述を尊重したものであろう。

以上のように原話の記述を尊重しながら『こどものとも版再話』を膨らましていくことが認められるが、それらは物語の構成の緊密性を保持・確定した上でスーホと白馬の間を割くとのさまの姿をずるがしこく横柄なものとして強調し、またスーホのとのさまへの純粋な憤りを際立たせている点が特徴的である。こうしたとのさまに関する表現は、原話を語り伝えていたモンゴルの人々の思いの現れでもあったろう。領主の圧政の下で苦吟するそれらの人々の嗟嘆と願いがスーホを彼らの「好ましい典型」<sup>8</sup>として作りあげたのだが、この絵本ではそのスーホの姿が、愛と正義を体現する人物象徴として普遍的な意味をもって形象化されているのである。ちなみに、スーホが白馬にのって競馬のおこなわれる場所に着いたときのこととして、

けいばの場所には、見物の人たちがおおぜい集まっていました。台の上には、とのさまが、どっかりこしをおろしていました。

と書かれるが、これは原話にも『こどものとも版再話』にもなかったことばで、この時点で書き入れられたものである。とのさまの横柄なありさまを強調するための、原話の書きぶりにそった意図的な加筆といえる。

なお、この種の書き加えは、『こどものとも版再話』でスーホと白馬の交情を支えるために意図的に改変した諸点と抵触するものではない。右の意図的改変の諸点は、「これからさき、どんなときでも、ぼくは、いつも おまえと いっしょだよ」ということばの削除を除いて『福音館絵本』になってほとんど書き変えられず、そのまま生かされ、むしろ前述のような「大すきな白馬にまたがり」「スーホは、この馬が、かわいくてたまりませんでした。」などという加筆によって、スーホと白馬の強い絆を強調しているのだ

ある。更にこうした強調は、既述のような、原話での記述を『こどものとも版再話』で省略したものにつき『福音館絵本』で復活させる形で加筆がなされた場合とは別に、原話にもない表現でこの『福音館絵本』ではじめて書き入れられたもののなかにもみられる。例えば、とのさまの家来達の矢が逃げた白馬につきつきと刺さっていく記述のあとの

それでも白馬は、走りつづけました。

ということばの書き加えや、スーホの夢の中に現れた白馬の姿としての、

スーホが、なでてやると、白馬はからだをすりよせました。そして、やさしくスーホに、話しかけました。

ということば、及びそれに続く「そんなに、かなししないでください。それより、わたしのほねや、かわや、すじやけを使って、がっきを作ってください。そうすれば、わたしはいつまでも、あなたのそばにいられます。」のあとの

「あなたを、なぐさめてあげられます。」

ということばをあげることができる。

また前節で指摘したように原話にその記述がなく、『こどものとも版再話』に「こんなに きずをうけながら、しろうまは やつとのおもいで、だいすきな スーホの ところへ かえってきたのです。」と書き加えがなされたところは更に膨らみ、

わかい白馬は、ひどいきずをうけながら、走って、走って、走りつづけて、大すきなスーホのところへ、帰ってきたのです。

として、「走る」ということばの畳みかけにより白馬の懸命な姿を描き、感動をこの箇所に集中させる効果を作っている。それらも『こどものとも版再話』で意図したスーホと白馬の結び付きを強調する方向において、感動の高まりを作り上げているものといえる。

このようにみえてみると、『福音館絵本』では、モンゴルの草原の広々とし

たイメージ化を容易にすることは挿入しながら、「こどものとも版再話」で意図されたスーホと白馬の結び付きというモチーフが更に押し進められる一方、対象読者のひき上げに伴う原話の表現の復活などによって、とのさまのずるがしこくて横柄な様子やそのとのさまにたいして純粹な憤りをもつスーホの姿が強く際立てられているとみることができる。後者は原話自体の抱懐するいわば「民衆の心」ともいうべきものであるが、それが若くたくましいスーホの人格の、權威に屈しない純真さとして具象化し普遍性を与えられているといえる。こうしてスーホの純な怒りは、前者の彼と白馬の結び付きの強さというモチーフと呼応して互いを効果的に支えつつこの物語の主題を形成しているわけである。ただし両者は併存したまま物語の結末に至るといふものでなく、彼の心に残るやるせない憤りは、前節「こどものとも版再話」の考察で触れたように、

スーホは、どこへ行くときも、このばとうきんをもっていきました。それをひくたびに、スーホは、白馬をころされたくやしきや、白馬に乗って、草原をかけまわった楽しさを、思い出しました。そしてスーホはじぶんのすぐわきに、白馬がいるような気がしました。そんなとき、がっきの音は、ますますつくつくしくひびき、聞く人の心をゆりうごかすのでした。

という記述において、スーホと白馬の愛の具現である馬頭琴の美しく草原に響き渡る音色の中で、清冽な悲しみとして浄化され、慰藉とともに暖かい情調を湛えつつ深い感動を保証しているのである。

#### 四 《光村版教材》

この段階では、国語教科書教材として、①縦書きへの改め、②文節分けの施し、③説点の位置を多くすること、④学年配当に合わせた漢字の使用の配慮、⑤会話文の改行、⑥擬声語のカタカナへの書き改め（「カタカタ」な

どがおこなわれている。

挿絵も教科書という制約（A5判）の中で、広々としたモンゴルの草原をイメージできるように、地平線を背景にしてスーホの羊を飼う様子や競馬の様子などを写し出している。ただし、前の二つの絵本のようにスーホの個性的な相貌を掲げたりすることはなく、絵そのものによって読者をひきつける力は弱くなっている。あくまで教材文の深い理解を支えるための役割の範囲にあるといえる。

表現面での再吟味という点では、まず、『福音館絵本』に「おばあさんは、心配でたまらなくなりました。」とあったものが、この『光村版教材』で、

おばあさんは、心ばいになつてきました。

となつていることが目につく。これは、すぐあとに「みんなが心ばいでたまらなくなつたころ、スーホが、何か白いものをだきかかえて、帰つてきました。」とあることにより、おばあさんや近所の羊飼いなど、スーホをめぐる人々の不安が次第に高まる有様を表現するための効果的な改稿と考えられる。

また、『福音館絵本』で、「スーホは、うれしそうにわらいながら、みんなにわけを話しました。」とあったものが、

スーホは、にこにこしながら、みんなにわけを話しました。

と変えられているのは、原話で「蘇和看着大夥驚異的眼光、弁笑嘻嘻地大家説（スフはみなのおふしぎそうな顔を見ると、ニコニコしながらいった。）」とあり、これに近い表現にしたものであろう。「うれしそうに」では白馬を手に入れた喜びを直接に表すことになるが、「にこにこ」は、スーホの白馬を得た喜びのほか、暗い草原を無事に帰れたことではっとした気持や近所の人々が集まってスーホを迎えてくれたことへの感謝の思いなどの、より豊かな表情を描き出している。

更に、『福音館絵本』で「スーホは、この馬が、かわいくてたまりません



でした。」や「大すきな白馬にまたがり」（傍点呉羽）とあった記述はこの教材ではなくなっている。このような概括的な内容は、物語の具体的表現の中に既に込められているもので、その具象の中から読みとるべきことと考えられたものであろうか。

そして、前述のように、「《こどものとも版再話》に「ぼくの　かわいいしろうま。ほんとうにありがとう。これからさき、どんなときでも、ぼくは、いつも　おまえと　いっしょだよ」とあった記述のうち後半の文が《福音館絵本》で原話に従って削除されたものが、この《光村版教材》では

これから　先、どんな　ときでも、ぼくは　おまえと　いっしょだよ。と、再び書き加えられている。

そのほか、《福音館絵本》ではじめて書き入れられた「けいばの場所には、見物の人たちがおおぜい集まっていました。台の上には、とのさまが、どっかりとこしをおろしていました。」という記述が削除されている。これは、原話に忠実にしようとする意図とともに、このことばでのさまの領主としてのイメージを強烈にしたい、スーホと白馬の関係への集中性を失わせることを顧慮した上での削除であろうか。

白馬がとのさまを振り落として逃げる場面では、原話にも「《こどものとも版再話》にも《福音館絵本》にもない、

家来たちは、いっせいに、おいかけてました。けれども、白馬には　とて　も　おいつけません。

という記述がおこなわれている。これは家来達が矢を射るまでに至る必然性を付与するものといえる。

このようにみえてくると、この段階での改稿は、表記等においては国語教材用に沿うよう改められているが、内容面では、《福音館絵本》のそれを概ね踏襲しており、改変の大半は叙述の自然さや表現の繊細さや深みを確保するためのものであるといえる。

《光村版教材》は「《こどものとも版再話》からはじまる大塚勇三の一貫するこの作品に対する姿勢を認めることができ、この作品の改変の帰着点を示しているといえよう。

## 五 《光村版教材》指導上の留意点

前節までに述べたことを踏まえて、教材の特徴を生かした指導のありかたについて留意点を考える。

この教材は、数度にわたる改稿により多くの箇所原話に対して意図的な改変などが施されているが、そうした改変は、構成を緊密にし表現の調琢をはかった上で、スーホと白馬の結び付き及びスーホのとのさまへの純な憤りという二つのモチーフを交響させて感動と情調を確保しているものといえる。

まず、スーホと白馬の結び付きについては、オオカミを追い払った折、スーホがいった

①「どんな　ときでも、ぼくは　お前と　いっしょだよ」

ということばが以降の白馬との愛情の絆を規定している。

つまりこれが競馬の場面でのスーホと白馬の一体化を示す。

②でも、先頭を　走って　いくのは、白馬です。スーホの　のった　白馬　です。

という表現をもって現れ、更にとのさまによって仲を割かれても命をかけて白馬がスーホのところに到り着くところの

③白馬は、ひどい　きずを　うけながら、走って、走って、走りつづけ　て、大すきな　スーホの　ところへ　帰って　きたのです。

という記述、そして死んでも白馬はスーホと一緒にであることを示す、

④「わたしは、いつまでもあなたの　そばに　いられますから。」  
というスーホの夢中の白馬のことばや、馬頭琴を作り上げたスーホをめぐっ

ての

⑤ スーホは、どこへ 行く ときも、この 馬頭琴を もって いきました。

⑥ そして、スーホは、自分のすぐ わきに 白馬が いるような 気がしました。

という表現の中に表される。

これらのうち①・②・③・⑤の記述は大塚勇三が改稿を重ねる中で意図的に加筆したものと認められる。この点、へどんなときもへいつしょ」ということばに置かれている重みが確認できる。これらの記述を押さえながらスーホと白馬の繋がりをつまみ①で指定されたスーホと白馬の結び付きを構造的に捉えることが肝要である。つまり①で指定されたスーホと白馬の関係が②の競馬の際、表現間の関連性を見ながらスーホ・白馬の結び付きを構造的に捉えることが肝要である。つまり①で指定されたスーホと白馬の関係を②の競馬の際の一体化という形で証しだてられ、更に③白馬の死を顧みない帰着で頂点に達して、それが④を経て⑤⑥の記述によって沈静化するというものである。各々の叙述が有機的に重ねられながら③の感動の集約を保証しているといえる。そしてまた、このさまによって隔てられたスーホと白馬については、両者を別々に捉えるのは適当でない。大塚勇三による構成の改めを顧慮して、スーホと白馬を常に關らせて読むという配慮がほしいところである。<sup>13</sup>

この読解指導には、並行した時間の進行を視野に入れたところでのスーホと白馬の心情を捉えさせる発問、及び生徒の答えを受けての板書の配慮が求められる。また並列的にスーホ・白馬双方の心情を書き込ませる学習プリントなども効果的である。こうした指導を通して、「小学校学習指導要領」<sup>14</sup>第二学年の2内容B理解の領域の課題としての、

エ時間的な順序、場面の移り変わり、事柄の順序などを考えながら内容を読み取ること。

カ人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読むこと。

の達成が導かれることであろう。

右のような読みの指導をこの物語の第二モチーフともいうべき、スーホの純な憤りとこのさまの不当な扱いという点と絡ませながら読み進めていくことが求められる。この点の押さえには、「若々しい健康な野心」<sup>15</sup>をもったスーホの優しく純粋な人柄を気付かせることであろう。

こうした二つのモチーフが最後にスーホの深い悲しみに収斂されるわけだが、この内実の把握には、末尾の馬頭琴の悲しく美しい響きにあらわれるスーホの心を読みとらせるようにしたい。この読解には、「よんでいてスーホやとのさまに話しかけたくなったことはありませんか」といってスーホ・とのさまに手紙文を書かせるという作業を通しておこなうことも効果的であろう。具体的には、とのさまにスーホの悲しみを理解させる手紙や一人白馬との思い出をかき抱くようにして馬頭琴を弾くスーホを慰める手紙などが考えられる。

なお、こうした理解の前提として、赤羽末吉の挿絵を利用し、それと文章中の記述を呼応させながらモンゴル草原の広大なイメージを獲得させ、またテーマの読解に並行して、前節に指摘したおばあさんや近所の羊飼いの心の配の漸増する様子や、スーホの「にこにこ」の意味など、繊細な表現や競馬の場面の躍動する叙述にも気付かせることで、前掲学習指導要領力の一層の拡充がおこなわれるものであろう。競馬の場面の優れた表現性は、音読の際、指導に配慮工夫をおこなうのが効果的であろう。これらを含めて、「表現読みと話し合い」と学習活動の有機的な関連<sup>16</sup>をおこなうながら確かな読みを導かせたいものである。

(1) 神宮輝夫氏「スーホの白い馬」(『国語2年学習指導書』昭五五・二、光村図書出版)。

(2) 参照できた『中国民間故事選第一集』一九八〇年版は簡体字による

ものであるが、本稿における原話の掲出の際の表記は、原則として現代日本語のそれに従うこととする。

(3) この場面、原話では「蘇和醒來以後、就按小白馬的話、拿它的骨頭、筋、尾做成了一箇琴。(スフは目をさますと、シロのいったとおり、骨と筋と尾で胡弓をつくった。)」とある。

(4) 《こどものとも版再話》では原話の「奶奶」を「おかあさん」と訳出していたが、これは大塚勇三の育った旧満州における意味であると考えられる。《福音館絵本》以降ではモンゴルを含めて中国の一般的な意味としての「おばあさん」と改訳されている。「おばあさん」とすることでスーホに両親がいないという設定になるが、そうした逆境にあつて彼の素直さと明るさを失わない好ましい性格が際立てられることになる。

(5) この箇所の記事について更に説明を加えると、原話では「渾身雪白、又美麗又健壯、人人見了人人愛、蘇和更是愛得不得了。(全身雪のようにまっ白な、美しく、しかもたくましい子ウマは、シロよ、シロよ、とみなからかわいがられた。が、それ以上にスフのかわいがりようは大変なものだった。)」と描かれている。この点、前提として白馬は共同体の中の財産であるという意識が感じられるが、《こどものとも版再話》の右に掲げた記述を経て、この《福音館絵本》では、「からだは、雪のように白く、きりつとひきしまつて、だれでも、おもわずみとれるほどでした。スーホは、この馬が、かわいくてたまりませんでした。」となっている。再話を重ねることによりスーホ個人の所有物という様相を強め、個人としてのスーホと白馬の結び着きが際立てられていることに気付く。

(6) この中の「『我能出売小白馬嗎?』這樣想着、」は宮治氏の訳や大塚勇三の再話には生かされていない。前の「我是來賽馬、不是來売馬

的呀! (わたしは、競馬にきたのです。ウマを売りにきたものではありません。)」に吸収されているものと考えられる。

(7) 村松一弥氏編『中国の民話上』所収「馬頭琴」の解説には、

中華人民共和国内の蒙古草原に住むアルタイ語族モンゴル語群のモンゴル族の大部分は内蒙古自治区(百十七万人)にすむ。かつては汗(皇帝)にひきいられ、運搬に便利な白いフェルトばりの円形幕舎(漢族は包とよぶ)に住み、ヒツジという移動力を持つ機動力に富んだ騎馬遊牧民族であつた。しかし、清朝は盟旗制度をたて、一遊牧集落を単位とする行政区画である盟をさらにいくつかの旗(県に相当)に細分して行動区域を限ってしまった。

いらい、この地のモンゴル族は王爺などとよばれる日本の封建藩主に似た旗の世襲の長の支配のもとで半定居または定居の牧奴、農奴生活を強いられる形になった。だから本書に出てくるような殿様つまり王爺に対する怒りが、その民話にはにじみ出ている。という指摘がある。このことから推して、騎馬遊牧民族の心を競馬に勝つたスーホが体現し、そのスーホを清朝による盟旗制度の価値観の具現である銀三枚という形でとのさまが制約する、という象徴的意味がこの原話にはこめられているか。

(8) 西郷竹彦氏「民話とその『再話』について」——「信濃の民話」に拠りながら——(『文学』昭三五・一〇)にみられることば。

(9) 西郷竹彦氏(8)にあることば。

(10) 藤田悦子氏「スーホの 白い 馬」(藤原宏氏・長谷川孝士氏・須田実氏編著『小学校文学教材指導実践事典上 1・2・3年』昭五九・六、教育出版)の1「教材設定の考察」には(3)「指導方針・指導上の留意点」で「どんなときでも」の場面の具体的な叙述表現が指摘され、「これらの表現に気づかせる発問を柱だてし、豊かな読みへの出

発としたい。」とある。

- (11) 関可明氏「教材研究—スーホの白い馬— 表現間の関連性を深くとらえて」(『国語の授業』昭六〇・一二)。

- (12) ③の感動の集約を読み解かせるには、下房道子氏「文学教材「スーホの白い馬」の教え方」(中西一弘氏編『子どもを生かす国語の教え方 小学2年』昭五九・九、明治書院)に紹介された⑧の学習プリントの例など有効かと思われる。

- (13) 鈴木迪子氏「スーホの白い馬(光村)」(『国語科・わかる発問の授業展開 第二学年』昭五六・九)では、「わかれわかれになったスーホと白い馬は、どんなことを思っているのでしょうか」という発問の下での、別れたスーホ・白馬が互いを心配している様を対比的に捉える指導が紹介されている。

- (14) 平成元年三月十五日告示、平成四年四月全面実施の「小学校学習指導要領」。

- (15) 神宮輝夫氏(1)の解説。

- (16) 神林照道氏「人物の性格や場面の様子を想像しながら読むことの指導(理解ウ)」(藤原宏氏・渡辺富美夫氏編著『わかりやすい国語の授業 第2学年』昭五六・三、東洋館出版社)にその文例がある。

- (17) なお、この教材の最初の挿絵では、見開き二ページの上部を使ってスーホが馬に乗り犬を三頭ひきつれて羊を追う姿が描かれている。しかし貧しいはずのスーホが白馬と出会う前に馬を持っていた記述はないし、犬もこの物語の記述には現れない。ちなみに羊を襲うオオカミを白馬が撃退する場面でもこの挿絵に描かれるような犬は登場していない。白馬以外の馬に乗り犬をひきつれるスーホの絵は、『こどものとも版再話』や『福音館絵本』の場合にも各々の絵本の初めの場面でも描かれ、赤羽末吉はそれを踏襲したものと考えられるが、右に述べた

ように挿絵の内容は物語の記述とそぐわないところもあり、この挿絵をもってこの教材文を理解する際には若干の配慮が必要であろう。

- (18) 関可明氏「スーホの白い馬(大塚勇三)」(児童言語研究会編『一読総合法授業実践集 小学2年』昭六一・八、一光社)。